

平成州紙



おりおりの記

ティペラリーの歌

元国連大使 大島 賢三

国連など国際会議では、食事会やレセプション、コーヒーブレイク時の付き合いといった社交が付きまとう。こういう時に気の効いたジョークの一つも飛ばし、蘊蓄を披露するなどして上手にアピールできれば良いのだが、われわれ日本人は一勿論例外もあるが一不得手とする人が多いようだ。自分もその一人であると認めざるを得ない。しかし、マルチ会議屋はそうばかりも言っておれない。苦手なりに努力と工夫をしたものである。

その一つは、突飛かもしれないが、歌である。時と場合によっては歌も悪くない。と言っても、民謡やカラオケ風の演歌では受けそうもない。そこで持ち出すのが、第一次大戦の時に欧州大陸で戦う英軍将兵の愛唱歌だ。“It’s a long way to Tipperary ; It’s a long way to go...” で始まるこの“ティペラリー”の歌は、その昔、学生時代にイギリスでホームステイしたときに下宿のおばさんから教わった。

“Tipperary”とはアイルランドの古い町の名で、出征した兵隊さんが故郷を懐かしみ、恋人を想いながら合唱行進したとか。歌詩もいいがメロディーも勇壮で、今日でもイギリスでは人気があるらしい。

私はこの歌が替え歌になじみやすいことに気付いた。例えば、国連の安保理改革が遅々として進まないことを嘆いて、“It’s a long way to Security Council reform, it’s a long way to go...” という具合に。

丁度10年前になるが、志を同じくする日・独・印・伯の4カ国がグループを組み、新常任理事国入りを目ざし数カ月にわたり大外交キャンペーンを展開し



た。残念ながら結果は不首尾に終わったが、改革の機運は大いに盛り上がった。

当時日本は、非常任理事国を務めてもいた。理事国の15カ国は持ち回りで大使レベルの懇親夕食会を開く慣例があり、時には夫人同伴もある。

ある夫人同伴の夕食会の席上であったが、少々ワインがまわり、興が乗ったところで私は立ち上がって“Tipperary”を披露し、上記の替え歌に移った。テーブルの周りでは、何故日本の大使がそんな歌を知っているのかとびっくりであったが、この時、英国大使夫人がアイルランド系とかで、途中からメロディーの歌唱に加わってきたのには私の方がびっくり。

同夫人から大いにお褒めに与り、またの機会に是非披露してくれとお世辞を賜った。尤も、私の家内からは、「あんな恥さらしは二度とやらないで」と釘をさされてしまったのであるが。